

うんことへいわ——笑って、聞いて、つなぐ授業

絵本『うんこのてんし』(さく:鎮目博道/え:松本えつを/CHICORA BOOKS)を使った平和学習プログラム

対象

小学校中学年～高学年(低学年は1コマ目のみでも可/
中学生は発問を深めて応用可)

時間

45分×2コマ(独立実施も可能)

準備物

絵本『うんこのてんし』、ワークシート「聞いて、つなぐ」(人数分)、甲府七夕空襲の資料(本サイト解説ページの印刷等)

ねらい

①戦争が「フツーの子ども」の日常を襲ったことを実感する ②戦争体験を「聞いて、記録して、伝える」行動への意欲を持つ

この教材の考え方

戦争教材は「怖い」「重い」と子どもが身構えがちです。本書は「うんこ」という笑いから入り、実話の重みへ着地します。授業でも「笑っていい」ことを保障してください。笑いを入り口に、恐怖・安堵・感謝という感情の起伏を子ども自身のことばで言語化させることが、この授業の核です。

1コマ目:読む・感じる(45分)

時間	場面	活動・主な発問(◆)と予想される反応
5分	導入	表紙だけを見せる。◆「この絵本、どんなお話だと思う?」——「うんこの話!」「天使がいる」などの声を受け止め、「戦争の話でもあります」とだけ伝えて興味の落差をつくる。
12分	読み聞かせ	通して読む(約10分)。笑い声はさえない。空襲の場面は読む速さを落とし、絵を見せる時間をとる。
13分	感想の共有	◆「笑ったところはどこ?」→◆「こわかったところ・ドキッとしたところは?」の順で必ず両方出させ、板書を左右に分ける。「同じ1冊の本の中に、笑いとかわさが両方ある」ことを視覚化する。
10分	深める	◆「作者はどうして、こわい戦争の話に"うんこ"を入れたんだろう?」——ペア→全体。「本当にあった話だから」「読んでほしいから」「うんこのおかげで助かったから」などを引き出す。
5分	まとめ	あとがきの一節「うんこをしたくなかったから、僕は生きている」を紹介し、◆「これが実話だと知って、どう思った?」を次時への問いとして残す。

つまずきへの対応:「うんこ」で騒がしくなりすぎたら、制止せず「そう、その笑いがこの本の入り口です」と受けて次の場面へ。ふざけが続く場合は「主人公と同じ歳の子の本当の話」であることを先に伝えてよい。

2コマ目:知る・つなぐ(45分)

時間	場面	活動・主な発問(◆)と予想される反応
8分	想起・導入	前時の板書写真を見せて想起。◆「この話は、いつ・どこの話だった?」——1945年7月6日～7日、山梨県甲府市の「甲府七夕空襲」であることを地図で確認する。
12分	事実を知る	数字を提示:市街地の約74%が焼失/死者は当時調査で740人・後の調査で1,127人/焼失家屋約18,000戸。◆「数字が資料によってちがうのはなぜだろう?」——混乱の中で正確に数えられないほどの被害だったことに気づかせる。
10分	自分ごと化	あとがきの「どうしてももっとちゃんと父親に話を聞いておかなかったんだろう?」を読む。◆「みんなの家族や近所に、戦争のころを知っている人はいる?」——「戦争体験者から話を聞ける最後の世代」が自分たちであることを伝える。
12分	聞き書き練習	ワークシート「聞いて、つなぐ」を配布。質問リストを確認し、隣同士で「聞く役・話す役」のロールプレイ(話す役は祖父母になったつもりで自由に)。聞くときの約束(①急かさない②話したくないことは聞かない③「ありがとう」を伝える)を確認。
3分	まとめ	宿題(または自由課題)として聞き書きを設定。聞ける人がいない場合の代替(本・資料館・映像で調べる)も必ず示す。

評価の観点(例)

- **知識・技能:** 甲府七夕空襲の時期・場所・被害の概要を自分のことばで説明できる。
- **思考・判断・表現:** 「笑い」と「こわさ」が同居する本書の構成について、作者の意図を考えて表現できる。
- **主体的に学習に取り組む態度:** 身近な人の戦争体験を聞き、記録し、伝えようとしている。

指導上の留意点

- **家庭状況への配慮:** 聞き書きは「家族」に限定せず、「地域の方」「本や資料」も同列の選択肢として提示してください。
- **恐怖への配慮:** 空襲場面で不安を示す児童には、「主人公は生きのびて、ひいおじいちゃんになった」という物語の着地点を先に伝えると安心につながります。
- **発展:** 聞き書きの成果を学級新聞・発表会にまとめる、公式サイト「#うちの戦争のはなし」に投稿する(保護者の同意のうえ)などの展開が可能です。

あわせて活用: 公式サイトには「甲府七夕空襲とは」解説ページ(子ども向け・数字の出典つき)があります。授業スライドの素材にどうぞ。著者による出張授業・オンライン講演も受け付けています。